

Program

フレデリック・ショパン
FRÉDÉRIC CHOPIN (1810~1849)

チェロ・ソナタ 短調 作品65
Sonata for Cello and Piano in G minor Op.65

- I. Allegro moderato
- II. Scherzo. Allegro con brio
- III. Largo
- IV. Finale. Allegro

セルゲイ・ラフマニノフ
SERGEI RACHMANINOV (1873~1943)

チェロ・ソナタ 短調 作品19
Sonata for Cello and Piano in G minor Op.19

- I. Lento-Allegro moderato
- II. Allegro scherzando
- III. Andante
- IV. Allegro mosso

三船文彰 (チェロ)
BUNSHO MIFUNE, Cello

弘中 孝 (ピアノ)
TAKASHI HIRONAKA, Piano



□ にするものも面映ゆいくらい、
今や「ロマンチズム」という
言葉は時代にそぐわない死語となりつつ
あるようです。

絵: Masae

無形な物に対しての憧憬の念や情熱は、ITの力で瞬時に
情報を入手でき、思考の断片をデコレーションし、不特定多数の
人々に発信でき、リアルタイムに反応が得られる今の時代では
薄れるばかりです。

己の小ささを自覚しながら、想像力と感性を働かせ、見えざる
ものに繋がろうと命を燃やし、創出された19世紀の西洋文化の
数々。

本日の2曲のチェロ・ソナタはそういう意味において、まさに
「ロマンチズム」の時代の最上のエッセンスであり、体も脳もまだ
自分のものであった時代への郷愁に浸るための、せめてのよすが
として、奏で続け、聴かれ続けてほしいと、願うばかりです。

(三船文彰)

ショパン チェロ・ソナタ 短調 作品65

ショパン(1810~1849)がピアノ以外に興味を示した
唯一の楽器がチェロだったのは、親友がチェリ
ストであることにその理由があったようだ。

ショパンが1831年9月パリに初めて着いてから、
生涯を通じて親友となった名チェリスト、フランシヨーム
(1808~84)は出版者との交渉に関してはショパンの代
理人の役割をつとめたり、ショパンの数少ない公開演奏会をする
に当たってはパートナーとして組んだり、彼に捧げられたこのチェロ・ソナタの初演
を1848年2月16日のショパン最後の演奏会で共演した。そして、1848年10月死の床
についたショパンは彼を脇に呼んでモーツァルトを弾いてくれるよう頼んだ。

二人の深いすばらしい友情が数少ないチェロ音楽に一つの宝を加えること
となった。

ショパンの最後の大作となったこのチェロ・ソナタはヨルジュ・サンドとの愛が
破局し、体が結核に蝕まれ健康が衰えていった1846年頃に作られた。しかし、体調
と環境の不調とは正反対に、曲の内容はエネルギーで雄大、起伏に富み、ピアノ
のパートはショパンならではの華麗な書法で書かれており、チェロパートもフラン
シヨームの助言の功があつてか、技巧的にも申し分なく効果を発揮している。ピアノと
チェロが対位的に複雑に絡み合い、大作作曲家としてのショパンの創作の集大成
のみならず、19世紀を通して最も独創的なチェロの作品の一つとなった。



ラフマニノフ チェロ・ソナタ 短調 作品19

大ピアニストで作曲家のラフマニノフ(1873~
1943)の唯一のチェロ・ソナタは大先輩ショパンが
最晩年に残したチェロ・ソナタと類似点が多い —
調性が一致していること(ト短調)、メロディーがきれ
いなこと、構成が近似していること(4楽章)、そして
ピアノのパートが重厚で、最高難度(大ピアニストの作で
当然のことだが)などが上げられるが、何よりも二人とも生涯の親
友でチェリストだった友人との友情からチェロ・ソナタが生まれたのは興味深い
(ショパン — フランシヨーム、ラフマニノフ — ブランドゥコフ)。

22歳の時に作った第一交響曲の初演の不評(指揮したグラスノフが泥酔して
いたためと言われている)で強度の神経衰弱になり、まったく作曲の筆が取れな
くなったラフマニノフがダール博士の暗示療法により、1901年(28歳)の春にかの
有名なピアノ協奏曲第2番(作品18)に着手して自信を取り戻し、続いて同年の
夏に作曲されたのがこのチェロ・ソナタ。

ラフマニノフ特有の哀愁を帯びた腹郁とした抒情、協奏曲も顔負けのピアノ・
パートのヴィルトゥオーゾの書法、そして雄大なロシアの大地を思わせるメロ
ディー、…ピアノ協奏曲第2番や第3番同様、聴き手を魅了してやまない。

